

最優秀作品賞
「健康診断の贈り物」

橘 美沙さん

私は小学校五年生の時、健康診断がきっかけで病気を発見することができた。それまで、「毎年大して変わらない結果ばかりしか出ないのに意味なんてあるの？面倒だなあ。」と思っていた健康診断、この年も例年通りダラダラとやる気なく健診を受けていた。健康診断の結果が返ってきた時も、「どうせいつも通り異常なしでしょ。」と高をくくって真面目に見ようともしていなかった。ところが、結果には「要受診」の文字が。それまで大きな怪我も病気もしたことがなく、病院に行くのは眼鏡を作る時と風邪薬を貰う時だけだった私にとってその「要受診」という結果は衝撃的なものだった。しかも、整形外科。一体何が見つかったというのか。自覚症状など全くなかったため、何故病院に行く必要があるのかさっぱり分からないまま、親と病院へ向かった。

地元の小さな病院でレントゲン撮影をすると、渡されたのは大学病院の紹介状。「専門の先生がいるからね、一応見てもらっておいで。」という先生の言葉で状況がよく分からないまま生まれて初めての大学病院へ。レントゲンを撮り、MRI 検査をしたものの結果は「軽い側弯症なので経過観察を・・・」と、言いかけていた先生の言葉が止まった。何百枚もある MRI 画像の中から一枚を取り出し食い入るように見ている。光に透かして見て、他の先生を呼んで、何度も確認して、発覚したのは私が難病だという事だった。MRI 画像には小さな腫瘍が映っていたのだ。

それからの事はあっという間だった。病気そのものは治らない事、合併症の側弯症は腫瘍のせいで今後悪化する事が予想されるためなるべく早く手術をした方がよい事などを説明され、その場で手術室を予約、半年後の手術までのスケジュールが決まってしまった。自覚症状も全くないのにまさか手術の予約まで話が進んでしまうなんて信じられなかった。「先生はあんな事を言っていたけれど手術以外に方法があるかもしれない。」と、現実逃避をすることしかできな

かった。まだパソコンや自分の携帯電話など持っていなかった私は自分では何も調べることができず、「手術予定時間は十二時間」「背骨から椎間板を取り、自分の肋骨を移植する」という言葉達が恐ろしくて仕方がなかったのだ。先生や親に聞きたいことは山ほどあったが、自分の望む答えが返ってこなかった時のショックを想像すると何も聞けなかった。卒業間近の学校を休まなければいけない事、入部したてのバレーボール部の試合に出られない事、入院中に母の手料理が食べられない事、嫌で嫌で仕方がなかった。手術前日は、怖くて、悲しくて、病院のベッドで夜遅くまで泣いたのを今でも覚えている。

手術後、私が見たのは両親だった。二人とも手術の成功を喜んでいた。先生も「あれだけ早く見つけられたからね、随分良くなりましたよ！！」と、笑顔でレントゲンを見せてくれた。先生の嬉しそうな笑顔を見てやっと、病気を早期で発見できたことが幸運だったのだと理解できた。見せてもらったレントゲンは、こどもの私でもはっきり分かるほどの回復ぶりを示していた。もっと進行してしまった後だったら、いくら長時間の手術をしたってここまでの回復は望めなかつただろう。手術を無事に乗り切ったことで私の気持ちもどんどん前向きになっていった。クラスメイトが日替わりで書いてくれた応援メッセージが宝物になり、学校に復帰する日が待ち遠しくなった。看護師さんの優しさに感動し、楽しい入院生活を送れるようになった。

今でも難病との戦いは続いているが、合併症である側弯症の方は早期発見と先生がうまく手術してくれたおかげで一切悪化していない。当時は辛い事が多かった初めての手術だったが、今思うとあの経験によって私は少々のことでは動じない強さを手に入れ、友達や学校・病院の先生、家族のありがたさを心から感じる事ができた。あの時健康診断に引っかかったおかげで、あの時先生が小さな腫瘍に気がついてくれたおかげで、私は今仲間と元気にスポーツを楽しめるようになった。体について一切の不安なく自由に活動できている。

人はみんな、いつ何が起こるか分からない。予想もできないアクシデントがあり得ると知った私は、身近にいる人を大切にするようになった。「やってみよう！」と思った自分の気持ちを大切に、何にでもチャレンジするようになった。私は健康診断から、健康と、それ以上に大切なものをたくさんもらったのだ。あの時私が感じた温かさを、今度はみんなにお返ししていきたい。